

札幌市環境プラザ運営協議会 令和6年度第1回 実施概要

1. 日 時 令和6年10月29日(水) 18:30~20:00
2. 会 場 札幌エルプラザ公共4施設 会議室3・4
3. 出席者
 - (1) 委 員：安東 義乃 委員(合同会社エゾリンク)
宇山 生朗 委員(環境省北海道環境パートナーシップオフィス)
大沼 進 委員(北海道大学文学研究院)
橋本 結 委員(北大森林研究会) *公募委員
吉田 卓矢 委員(札幌市教育委員会教育課程担当課)
飯岡 慶崇 委員(札幌市環境局環境都市推進部環境政策課)
五十嵐 健二 委員(札幌エルプラザ公共4施設 館長)
 - (2) 札幌市：環境政策課環境教育担当係長、環境政策課推進係 係員
 - (3) 事務局：高坂 美江(市民活動担当課長)
上杉 直洋(札幌市環境プラザ)
榊 瞭太(札幌市環境プラザ)

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) あいさつ 札幌市環境局 環境都市推進部 環境政策課長 飯岡 慶崇 様
- (3) 運営協議会について
- (4) 委員 自己紹介
- (5) 議事
 - ・運営および施設利用状況について(令和5年度報告)
 - ・令和6年度事業計画および中間報告について
 - ・意見交換「展示の特集内容に関するテーマについて」
- (6) あいさつ 札幌エルプラザ公共4施設館長 五十嵐 健二
- (7) 閉会

5. 議事概要

- ・令和5年度事業報告および令和6年度の計画・中間報告
事務局から令和5年度の報告および令和6年度事業計画、中間報告を行った。

質疑応答

- (委 員) 一般利用者数の数を示していただいて、かなり順調に今年も推移していると伺ったのですが、コロナ前の水準を参照してどれくらい人が戻ったのか。
- (事務局) 水準としては、まだコロナ前には戻ってきていない。ただ、いま現在その数値に追いつくために、さまざまな取り組みを行い、利用者は増加してきている。

(委員) あそびバエコプラザの内容について、団体の取り組みを教えてください。

(事務局) 毎月参加している、札幌消費者協会の環境研究会については、「ゲームでエコを学ぼう」という企画ですごろく使ったゲームや、ゴミの分別ゲームを実施している。

北海道紙芝居研究会のかぜるんについては、自然・生物・植物をテーマにした紙芝居を提供している。

(委員) 情報発信・交流・学習の提供という施設の基盤的取り組みから、アウトリーチ型の普及啓発活動など、提供すべきものがきれいに整理されている。一方で、計画で決められている回数みみのアウトプットになっていて、誰がどのようにどのような成果を目指すのか、一定のアウトカムが見えないのがやや気になった。

ビジョンとしては、環境教育の入り口の第一歩を踏み出せる場所というのを、掲げていることに共感するが、ややフォーカスが大きいので単年度単位で解像度を高く、今の時世では何をすべきかを整理して全体を整えていくと、何の事業をやるべきか全体の整合性をとれるのかと思う。

(事務局) これからの事業をどう進めていくのか、ターゲット層がどのように変容していくべきかを踏まえて次年度の事業計画を考えていく。環境のトピックスは時勢によって変わっていくため、最初に思い描いたものがその5年後、確実に絶対同じものを実施できるものではないので、その都度アップデートが必要と考えている。その整理をしながら事業を構築していきたい。

(委員) 総合学習が令和5年度208名ということだが、どういった学習が行われているのか教えていただきたい。

(事務局) どのようなテーマでの見学を希望されているかの聞き取りや、実施の人数によって構成が変化する部分はあるが、施設屋上の太陽光パネルを、実際に間近で見たり、触ったりしながら、エネルギーについて学ぶことや、発電する自転車を漕いでみる体験、環境学習に関するアクティビティなどのプログラムを活用しながら体験活動を行っている。

申込については、時期によって偏りはあるが、小学校・その他団体に限らない状況で、特別支援級や少人数の学級で来館することも直近では多い。

(委員) 環境教育教材の貸出について、教えて欲しい。

(事務局) 夏場の川活動や、体験活動をする団体が利用を求めて、施設に連絡をいただくことがある。夏場だと常に物品が貸出されている状況で、日を開けずに貸出されているので、ニーズはかなり高いものと思う。当施設で運営している講師派遣制度で、講師にも活用してもらっている。(川活動の貸出物品について) 件数でいうと、かなり回転のいいものとなっている。

- (委員) 事業の最終的な目標がどこにあるのか、目標に対する実施効果の測定が見られると、また何か見えてくると思う。
- (事務局) さまざまな事業を実施するなかで、どのような効果があったのか、ターゲットがどう変容したのかをよく確認して、その結果のフィードバックを受けて、次のステップの枠組みとし、次年度の事業の計画の中に盛り込んでいきたい。
- (委員) 環境プラザは、施設として何か前面に出て実施することもあれば、さまざまな団体の活動を支える側面もあり、“繋ぐ”ということが大事だと思う。主催となるもの、繋ぐ活動という点でメリハリをつけられるとよい。そのうえで、成果について、人数というわかりやすい指標になりがちだが、参加者の声なども一言入れることで、取り組みにおいて参加者に響いた内容や、改善に繋がる点が見えて、アウトカムの指標に大切な目に見える成果になると思う。
- (委員) 環境プラザとして、伸ばしていきたい、力を入れていきたい事業を教えてください。
- (事務局) 施設運営をしていく中で、職員が事業をしていくことよりも、他の団体の皆さんにどれだけ活躍してもらえるかだと思う。全国的な取り組みとして、こどもエコクラブの活動がある中で、札幌市内の現状としては、目に見える形で成果が上がってくるのが少ない。団体数の増加にスポットを当てて力を入れていくことができれば、業務の幅も広がっていくと考える。例えば、講師派遣や施設見学、物品の貸出にも影響し、利用件数についても増加が見込めるのではないかと思う。
- (委員) さまざまな団体に活躍の場を提供し、活躍してもらえるように応援することが主な業務となり、活躍したい方がたくさんいることがいいことだと思う。そういう状況になるために、施設側がイメージを固めずに、少しふわっとした方が、さまざまな団体に活躍してもらえるとと思う。
- (委員) “繋ぐ”という最上位の目的から考えると、今までの関心層の方を維持・保持していく、一緒に作っていくというのが何より重要で、加えて、繋ぐためには常に新たな対象にリーチしていかなければいけないということが同時にある。その二つがある種、この施設のコンセプトになる。それをぶら下げて何をやっていくかと考えていくと、自ずと整理がついていくような気がする。
- (委員) 施設の立地について、知っている人は知っている。もっと外に向けてPRし、興味を持ってもらえる材料を、環境プラザの中にもっと作れるとよい。
- (委員) 指定管理者のノウハウを使い、さらに立地のメリットを生かし、さまざまな団体の繋がりを得られる場所にしていけたらよいと思う。
- (事務局) 施設として、環境教育についてのストーリーを描きながら、さまざまな人たちに、機会を提供できるよう、目的の整理をしたうえで事業を展開していきたい。

・意見交換「展示の特集内容に関するテーマについて」

環境プラザの展示コーナー内にて実施しているパネル展をより魅力的な取り組みとしていくためのアイデアについて、各委員と意見交換を行った

(委員) 普段見えないところが見える、というのが面白いと思う。札幌はアスファルトが多く、土に触れないというか、そもそも目に触れないことが多いが、その土の中には虫もいて、土の色も違う。そうした見えない部分が、見える展示があるといいと思う。また、展示のために来てもらうだけではなく、ワークシートなどを置いておき、展示で見たことを街中や生活のなかでも探す取り組みにつなげると、自然に興味を持つきっかけとなると思う。

(委員) (令和6年度の蝶の取り組みを聞いて) 蝶の話が面白いと思った。蝶を実際に見て描けるようになる。木も同じで、人間は見えている部分しか描かないので、木の上の部分は葉っぱしか描かないが、実は生態系において木の見えている部分は、ほんの一部分で根っこの世界のほうが重要だということがわかる。そういうことが見えてくると、自然のある点でしか見なかったものが、面として広がっていく、見えないところを想像で補いながら、環境に対する意識を広げるということで、なんかこう『ハッ』とする瞬間みたいなものを与えられるような、そういう流れがあるような、面白いとっていて先ほどの話を聞いていた。

また、身近なことと繋げるということも面白い。最新の科学・自然科学はすごく進化していて、例えば『自然』と言えば、昔は研究者の中でも自然の生態系である森とか山とか、人間界から離れたところを自然と想像するが、やはり人間の生活や街が広がってくると、自然と人間を分けられなくなってきて、学問の世界でも自然生態系の中でも、都市生態系という概念が入り込んでくるようになった。そこで、都市の生物の研究なども、知見が広がっている。街にはコンクリートが多いと話があったが、その通りで、種を飛ばすという戦略を持っていた植物が都市に住むと、そこに飛ばしてもコンクリートがあるので生きられない。すると、母体の側だと安心だということで、綿毛を少なく種を重くするような進化が起きたりと、普通に見ていた生物が、見えないところですごい能力を持っていることが見えてくる。そうした、自然への気づきはすごい面白いと思う。最新の知見ともうまくリンクできると面白いと思う。

(委員) (五感をとおして学ぶといった時の、触感に加えて) もう一つ五感であるとしたら、『味覚』があると思う。最近、北海道で獲れる魚が劇的に変わっていて、ブリとかハマチなど南から上がってくるような魚が獲れて、今年はサンマが少し戻って来ている。サンマは乱獲のせいもあったが、もちろん気候変動とか、海流の温度が上昇しただけでなく、さまざまな要因があるが、普段食べている魚、身近で獲れる魚が実は変わってきている。

実現可能かどうかは別として、市場の方に刺身を見本にいただいて、「先着何名様試食あり。」みたいなものがあったらいいのでは。子どもたちは、お寿司が大好きで、刺身みたいな感じで食べるけど、本当はどういう姿をして、どう泳いでいるのかが、わかってないような気がする。面白かったのは、AIが賢くて、サケが川を上っている絵を描かせると、鮭の切り身が泳ぐ絵をAIが描いてきた。ネット空間に落ちている鮭は切り身で、泳いでいるサケではない。それが、もしかしたら子どもたちのデフォルトかもしれない。子どもにサケが泳いでいる絵を描くように話をしたとき、鮭の切り身が泳いでいる絵を描かないと思うが、サケが川を上っている絵を描かせるとどういった絵になるのだろうか。

味覚・触覚と普段食べているモノたちが、本当はどこにいて、どういう生活をしているのか。そこに、「刺身の試食、先着何名様」となるとお客さんが来るかと。

(委員) 生活実態に落とし込むっていうのは大事なこと。水産のネタを深堀すると、北海道内の漁師・仲卸・魚屋を含めて、水産物の持続可能性を追求しようという熱量で集まっている団体に監修をしてもらいつつ、調達も団体にしていただいて、どれだけ魚のビジュアルが変わっていくのか。実際の魚を持ってきて、伝えていくという展示企画もよいかと思う。

(委員) 自転車を漕いでプロジェクターが映る仕組みが世の中に出回っていて、2年ぐらい前にあるコンサートで、最前列に自転車を並べ、たくさん漕ぐことによって、ライトが光り、音がなりマイクが入り…。「それだけ電気が大事です」ということが身に染みて体感でわかる。

それを、応用して環境プラザの中で映像を流す時、誰かが一生懸命漕がないと放映されない。ここで、エネルギーの重要性を伝える。という、企画も面白いと思う。

他に、衣服を集めて化学分解し、それを、アップサイクルして提供する仕組みというか事業があるので、服を収集する拠点として、環境プラザを活用し、提供した人たちに対して、アップサイクルした素材のキーホルダーを提供するなど。また、海洋ごみをアップサイクルして再生させる動きもあり、打ち上げられた漁網をランドセルにしたり、木材を集めて名刺入れにしてみたりとか。ゴミを再生する部分のプロセスを展示する企画は、見えていなかった部分でもあり、「これがこうなるんだ」という、展示をしてみる。かつ、その過程を説明していくことで、ストーリーが生まれ、消費して出されたものが、変わる可能性があり、単純に捨てるという行為を見直す気づきとして生まれる。これもひとつの、見えないものを見出すものと思う。

(委員) 子どもを博物館なりに連れて行くと興味を持って見るかと言うと、そこに問題意識を持っていないと見ない。そう考えると、そこに問題意識を作る導入がある展示をすることが大事かと思う。また、子どもが学んで帰っても、親に問題意識がないと、いくら学んでも行動化に繋がらない。子どもが学んできたことが生かせるような展示、親と来た時に、子どもが知っていると言えられるような展示を生むことによって、子どもが生き生きしながら、親を巻き込むというように考えると、小学校で学ぶような題材を、例えば、スーパーマーケットの学習をした時に、スーパーマーケットのエコがいっぱいある。でも、親は知らずに買い物をする。子どもが学習したことを語りながら、親と会話しながら学びが深まるとか、ゴミ・水の学習もそうですが、すべて子どもは、学んでいるので、「知らないことを知ろう！」というよりも、知っていることを生かして楽しいと感じる展示も一つありかと思う。

(事務局) 環境教育の現場というところと、生活空間に対して共通言語を持ってくることによって、その結び付きを生む展示を展開していくと、より環境教育の入り口として、施設の在り方が前進できるのかと思う。

(委員) 環境教育の中で環境問題や、愛着を育てることももちろん大切だが、もう少し複雑なこと相反すること、例えば外来種の問題でブラックバスはいない方がいいと言う問題があったとして、でも、そこでは地域にフィッシャーが来てくれることによって、お金が潤うようなところがあり、一概にブラックバスを排除することができないこともある。実際の地域の人間の生活と結びついた中で、環境を考える。そういう機会ができるといいと、兼ねてより思っており、環境に配慮しつつ、多角的な視野を持てる人を育てるということができたらと考えている。

以上